



三ヶ根山上 殉国七士の墓 (13頁参照)



マーシャル方面遺族会
 (旧クェゼリン方面戦没者慰族会)
 〒103 東京都中央区
 日本橋人形町1-8-2
 電話 03-3661-8760
 振替口座東京0-93487 番
 編集兼発行人 佐藤宗丕

平成五年度

慰霊祭 総会 直会の御案内

会長 佐藤 宗 丕

会員並びに会友の皆様にはお健やかに新しい年をお迎えのこととお慶び申しあげます。

恒例の慰霊祭と総会を次の通り行いますのでお知らせの方々をお誘い合せ御参集下さい。

日 時 平成五年三月二十八日(日)

午前九時集合 靖国神社参集所前

慰 霊 祭 午前十時 昇殿 参拝

総 会 午前十一時 靖国会館二階

議 題 諸報告・会務計画・予算・役員改選

本号に同封した私製はがきには、慰霊祭に参加しない方も必ず全部の欄に記入して二月末日迄に御投函下さい。

会員名簿訂正に関係ある事項は特に正確にお書き下さい
 「環礁座談会」(6頁参照)に参加を希望される方や霊砂御入用の方は、はがきの通信欄にお書き下さい。

◎九段会館に宿泊を希望される方は、料金を添えて二月末日迄にお申込み下さい。料金は一室五人の相部屋で、一泊二食付一人七、六二二円の特別割引(30%)価格です。申込み後の取消しや変更は直ちに左記に電話して下さい。

〒102 千代田区九段南一―六一―五

九段会館 宿泊部(電話03―三三二六―一五五二一)
 その時は本会にも電話でお知らせ下さい。

◎第二四回直会(なほらい)旅行会を次の通り行います。人数に限りがありますので早目にお申込み下さい。

順路 靖国神社Ⅱ東名高速Ⅱ西浦温泉(泊)Ⅱ三ヶ根山Ⅱ豊川稲荷(中食)Ⅱ東名高速Ⅱ東京駅Ⅱ九段会館
 (以下16頁へ)

目

次

慰霊祭 総会 直会の御案内	1
父の鎮魂に一万七千キロ	2
クェゼリン墓参の想い出	3
夫の遺書	4
戦地からの便り	4
兄の思い出	5
科学では説明不可能な事象	6
環礁座談会(ルオット)の予告	6
環礁ミレー抄(17)	6
ブラウン環礁の玉碑(完)	7
靖国神社秋季例大祭	11
盛大に斎行	11
千鳥ヶ淵戦没者墓苑	11
秋季慰霊祭	11
杵き雲の下で(完)	11
東海の聖地 三ヶ根山	13
名簿訂正(3)	14
本部だより	14
寄付者芳名	15
靖国神社のみたままつり	15
みたままつり献燈について	15

父の鎮魂に一万七千キロ

戦死後半世紀 南瀛への旅

(東京) 石川 勲

ちょっとギルバート諸島まで旅行に行ってきた。十日ばかり休暇を取ります。あとをたのみますと言うと、え、そんな島どこにあるんですか、何をしに行くのですか、誰と行くんですか、どうやって行くんですか、食べ物や水は大丈夫ですか、毒蛇などはいませんか、矢継ぎ早の質問責めにあった。実は、私にもよく分からないのです。

では皆さん、ちょっと世界地図を広げて見て下さい。地図の真ん中に赤道と日付変更線が交差している所がありませぬ。そこに小さな字で「ギルバート諸島(キリバス共和国)」と書いてあるでしょう。太平洋に浮かぶ小さな島国です。分かりましたか。

戦前の私の家庭は、父が東京のせり人として活躍し、母は仲卸店舗「三光山」を経営していた。そんな関係から私も幼い時から築地市場に出入りしていた。引込線に入ってくる蒸気機関車を見ては、歓声を上げていた。その父が昭和十六年秋に「歓呼の声」に送られて海軍へ出征をしてみた。そして、その年の十二月八日が真珠湾攻撃に始まる第二次世界大戦の幕開けとなった。

父の乗っていた船「八海山丸」は、南洋群島方面で哨戒任務に当たっていた。敵の潜水艦を二隻ほど爆雷攻撃で沈没させた戦果があるが、昭和十七年十月二十二日、敵駆逐艦と交戦、父は敵弾に当り戦死し、「八海山丸」は沈没した。私が五歳の時の事である。小泉信三先生の長男小泉信吉主計大尉も船と運命を共にされた。

たまたま同業者のお嬢さんが徴用で海軍省に勤務されていた関係から、父の戦死した場所がギルバート諸島だということが分かった。早いもので、あれから五十年も過ぎてしまった。父が生前に活躍した海を見る。これが今回の旅行の目的でした。

私達家族四人の旅行ルートは、東京―ホノルル―マジユロ(マーシャル諸島)―タラワ(ギルバート諸島)―マジユロ―グアム―東京で、約一万七〇〇〇キロの旅行です。マジユロとタラワの間は週に二便しか就航していないので、欠航が大いに心配された。ギルバート諸島は英国の信託統治領であったが、一九七九年に独立、キリバス共和国となり、首都をタラワに置き、人口は約六万人である。

日付変更線を跨いで東西に三八〇〇



タラワ環礁のベシオ島にある南瀛之碑

km、赤道を跨いで南北に二〇〇〇kmの海域に点在する三三の島や環礁から形成されており、その海域は日本の国土の約一三倍、陸地は長崎県の対島と同じ位である。

環礁と言うのは大昔の火山の外輪山が海面に頭を出している様なもので、珊瑚礁で出来ている。直径が数キロメートルのものから数十キロメートルのものまで様々で、海抜はほとんど一m以下である。又、島は細長く何キロもあるが、幅は広い所で数一〇〇m、狭い所は数mしかない。その細長い島が幾つも連なって大きな輪を作っている。輪の内側の海は遠浅で、砂浜が珊瑚礁の碎片で形成されている。陸地には椰子の木が生い茂り、バナナやパイヤの木も見ることが出来る。

タラワのベシオ島では昭和一八年の

秋、日本軍の守備隊にアメリカ軍が襲いかかり、大激戦の末、日本軍が全員玉碎し、数千人の方々、戦死をしている。

ホノルルに二泊、マジユロに二泊、出発をして五日目にやっと目的地タラワに着いた。猛烈に暑い。

現地人ガイドの案内でベシオ島にある南瀛の碑や戦蹟を訪ねた。島内のそここに、赤く錆びた旧日本軍の大砲や高射砲が当時のままで遠くの空を睨み、司令部や防空壕もそのまま残っていた。慰霊碑に花輪と日本から持参した靖国神社の御神酒を供え、父を始め異境の地に眠る幾多の英霊のご冥福をお祈りした。その後海岸で、一昨年に病死をした母の形見の品を海に流し、天国での父と母の再会を願った。

婦りの車の中でガイド氏が、昔覚えた日本の軍歌を歌って我々を慰めてくれた。「日本の兵隊さんはみんなよい人達だった」と懐かしがってくれたのが印象的であった。

この国は英国領であった事から道は日本同様左側通行で、走っている車の大部分は日本の中古車である。キリバスを始め南洋の国々は資源に乏しく、収入が少ない事から、日本からの援助を期待している。現地では病院や学校、そして道路等も日本の援助で造られていた。

日本に対する関心も深く、高等学校の外国語の授業にも日本語が採り入れ

られているとのことであった。日本はこの様な援助と交換に、領海での漁獲操業権を取得しているようだ。又、近年は海草類の養殖が一つの産業に成長しつつあるとの事であった。

原住民の衣食住は、Tシャツと腰巻一つ、主食は昔のタロ芋から米やパンに変わっている。飲料水は雨水。住宅は高床式で椰子の葉が屋根に乗せてあるだけであった。全員がクリスチャンで性格は明るく温和である。

日本から同行を願った旅行社の園田氏の計らいで、近くの部落を訪ねた。

我々の訪問の趣旨が分かると、ひどく関心を示し、部落の食事に招いてタロ芋やパンの木の实、ココナツや獲りたての魚介類、それに椰子の实のジュースにパイヤ等をご馳走してくれ

キリバスダンスを踊る少女達



た。どれもこれもみんな美味、かつ、珍味であった。

食事の後は民俗舞踊のキリバスダンスを披露してくれたり、歌を聞かせてくれたりと、部落中総動員の大歓迎を受けた。後には、昔日本の兵隊さん達と盆踊りを踊った事があるから、今度は私達にも一緒に踊ろうと誘われ、色は黒いが南洋じゃ美人の娘さん達とダンスを踊る事になり、楽しいひと時を過ごす事ができた。

名残は尽きないがタラワに二泊後帰途についた。再びマジュロに戻り一泊、このレストランには、昔日本の委任統治地であったせいか刺身定食や天ぷら定食があった。又、スーパーマーケットでは「おでん」も売られていたのには驚いた。日本の漁船の出入も多いとの事であった。最後は小さな島々を巡りながら、グアム島に一泊して、無事に帰国する事が出来た。

旅の途中で立ち寄ったアメリカ軍の基地だけの島ジョンストン島、同じくクエゼリン環礁、雨の多いコストラエ島(旧クサイ島)、スペインが統治したボナベ島、世界最大の環礁トラック島、太平洋戦争の激戦地サイパン島、それぞれ思い出を残してくれた。

今回の旅行での収穫は色々あるが、心配な事は最近の地球汚染の問題である。このまま地球の温暖化が進むと海面が上昇し、私達が見て来た太平洋の

美しい島々は大半が海中に没してしまふ恐れがある。我々ほもっと地球全体の環境問題について考える必要があるように感じた。

又、残念であった事は、天候に恵まれすぎて南洋特有のスコールに出会う事が出来なかったことである。水の確保をどのようにするかが見なかった。

しかし、夜空に輝く南十字星の美しさ、原住民を始め島々で出会った人達の親切、昔、父が航海の途中に見たであろう景色を私もこの目で見る事が出来た。

マジュロ環礁やタラワ環礁の素晴らしい景色、特に海中の珊瑚礁の美しさは生涯忘れる事ができないであろう。再び機会を求め、この美しい島々を訪ねて見たいと思う。

△本稿は、筆者が勤務している東京中央青果株式会社の社報より転載させていただきました。▽

クエゼリン墓参の想い出

(東京) 高橋 鎮夫

平成三年度厚生省主催の現地慰霊巡拝に、永年の願いが叶って参加できたのはありがたい幸せでした。

三月二日グアムからマジュロに向う時もそうでしたが、三月五日追悼式のためにクエゼリン空港に降りた時の感慨を忘れることはできません。

四十八年ぶりに初めてこの地に立つて、何も言葉になりません。ただ胸一杯になるばかりでした。墓碑の前に国、遺族会、遺族それぞれの供物をそなえて死者の冥福を祈りました。島はすっかり整地されて、道路が走り樹が植えられ、白い建物が建つ米軍の基地でした。いつか新聞で見たことがある戦闘の写真のいかげつも見られないのは当然でした。ですが追悼式のあと島内巡回で、米軍が最初に攻略したという旧日本軍の砦の跡を見た時、また外洋に向って汀に立った時、死んだ肉親への思いは例えようもなく、悲しみに打ちひしがれるのみでした。

群青を湛えて展がる太平洋、半円に画かれた様な遙かな水平線まで、そこには島も船も海鳥も人影も見えませんが、その海を前にして立っているだけで胸がつかまってしまう。ここでは言葉は何もいらぬと思いましたが、かつて作家の故大岡昇平が死んでいった戦友達を念じて言った「生きている者があの戦争で死んだ者のことを思うとき、ただ涙を流すしかない」という言葉の思い出しがみしめました。

北満からこの地まできて、一カ月たらずで全滅してしまった若い将兵たちは一体ここでの戦いをどう闘ったのでしょうか。一艦一機の来援もなく、海と空からの攻撃を受け二万余の軍が戦車を盾に侵入してきた時、死が向うから襲いかかってきた時、死が決してし

まった時、壮絶な死を迎えなければならなかった時、祖国の安泰を祈りながらもそこには万斛の涙がかくされていたように思います。ただ海に向って涙を流し、安らかな眠りを祈るばかりでした。

ホテルの二階から朝晩眺めたマジュ

夫の遺書

(埼玉) 近藤 マスエ

(筆者 海軍兵曹長・近藤八郎) 大正6年生 昭和19年2月6日クエゼリン島に於て玉碎、第六根拠地隊司令部附)

短期間の実に楽しい結婚生活であった

厚く御礼を申す

俺もこの度は生還は帰し難い

武人の妻として誇を持ち

絶対に取り乱してはならぬ

七転八起の精神を振り起こし

世の荒波を乗り切る様

くどい事は申さぬ

幾度も申ししていた言葉を思い起し

老先短き両親に仕る様

尚、坊やの顔も見たいけど致方ない

清く美しく育てて呉れ

男子の場合

姓名 近藤征一郎

女子の場合

口の海はやはり同じ海でした。ここに五泊、毎朝夕、海が眺められ毎日死んだ肉親を思っすごせしたのは何よりの供養ではなかったかと思えます。死者に対しては遅きに失した慰霊の旅でしたが一つの責任を果たしたような気持ちになったのも事実でした。

姓名 近藤洋子

と命名して呉れ

暑さ寒さに留意され

自愛專一に

二十二日夜認む

敬具

夫より

マスエ殿

(遺書は原文のまま)

主人は佐世保海軍の防備隊勤務で、主人二十七歳、私二十五歳で、昭和十七年十一月結婚致しました。現在の方々のような楽しい新婚旅行どころか、任地を離れる事は出来ず、それに佐世保港は軍港なので、高い塀で囲まれ、小高い山に登る事も禁じられ、一緒に歩くことも出来ませんでした。

翌十八年十一月、横須賀より南方に

征くと言って出征致しました。それき

り葉書一枚、戦地よりも参らず、佐世

保の軍部に問い合わせても、元気に勤

務しているとの返事のみで、不安のま

ま、十二月に女子が誕生致しました。

夫の遺志により洋子と名づけました。

四年目の二十二年一月二十一日、役場

より、マージナル群島クエゼリンにて十九年二月六日玉碎との通知を受けました。玉碎なので当時の様子等、委細知る事も出来ません。二十二年三月遺骨受領に行きましたが、持ち帰った壺の中には『近藤八郎の霊』と記された紙一枚でした。

私は主人が残してくれた遺書を、私死んだ後は、自分の棺の中にも入れて貰うか靖国神社に奉納して、若くして祖国のために死んだ者の気持ち、後の世の若い戦争を知らない方々に伝えたいと、思っています。

現在の平和日本が築かれた裏には、沢山の人の血と涙が流されている事を知って戴きたいのです。戦後の若い方々は幸せだなあとつくづく思います。でも、未だ世界の何処かで好むと好まざるとにかかわらず戦争が起き、社会面には世界の悲しい不幸な出来事が報ぜられています。戦争は嫌いです。二度とあってはならないと思います。

本心に戦争とは無残なものです。敗戦の日本では、誰もがいろいろな苦しみ悲しみを味わった事と思えます。私も若さと健康が頼りで一生懸命でした。おかげで、娘も無事成長し、結婚し、縁あって草加に住み、現在に至っています。娘に子供が無いのが不足ですが、これも致し方ございません。

一度、玉碎した主人の戦跡を巡拝したいと思っておりましたが、八年前に念願かなって十日間、中部太平洋慰霊

戦跡巡拝団に参加することが出来ました。南溟の地で食料、弾丸補給の輸送が途絶えた孤島で多くの戦士の方々の苦勞、無念の死を眼のあたりに見て、胸ふさがる思いでした。私はクエゼリン島の砂浜で砂と貝を遺品と思い持ち帰り、墓に埋めほつと致しました。これで、主人に逢う事が出来たような、心の安らぎを覚え、役目を果たしたような気持ちです。

この拙い一文が今後の平和への役に立てばと存じます。

女子の場合
姓名 近藤洋子
と命名して呉れ
暑さ寒さに留意され
自愛専一に
二十二日夜認む
夫より

戦地からの便り

(神奈川県) 栗田 千代子

(発信者 栗田武雄) 明治40年生、昭和19年2月6日クエゼリン島に於て玉碎、第六根拠地隊司令部附)

前略 度々手紙ありがとう。御前や子供等の気持を充分知りながらついで

十九年二月二十六日の新聞に、クェゼリン・ルオット玉碎。音羽侯戦死と発表されたので、兄も戦死したと思いました。その時母が、肩をおとして静かにうなだれて座っていた姿が、今でも目に浮びます。兄の遺骨として戴いた白木の箱の中には、何も入って居りませんでした。

私は十八年十二月に結婚して、記念写真を送りましたが、多分兄のもとへは届かずに、海の中に消えてしまった事でしょう。家は弟が継ぎ、父は二十五年に、母は二十六年秋に亡くなりました。

三十九年の二十年祭の前夜祭、慰霊祭に出席できた事は、兄からの導きのような気がします。今でも時々夢を見ますが、「今までどこに居たの？」と聞いても返事がない悲しい夢です。

ここまで書きましたら、急に涙が流れてきました。肉親を戦争で亡くされた方々は、みんなこのように悲しい思いをして居られると思います。

靖国神社に眠られる御霊様のお蔭で、日本が平和になり、みんながこんなに幸せで居られるのだと、手を合せて居ります。

科学 (サイエンス) では 説明不可能な事象

(東京) 石谷 典夫

この世には科学では到底証明、説明

することが不可能な摩訶不思議な現象がある。若い頃の私は、どちらかというと合理的思考が強く、数学の世界のように1プラス1は2以外にないという、それはそれで正しいのだが、すっかりとした、ものの明解さ、真理を好む傾向があった。今、考えると、全く若気の至りと言わざるを得ない。私の

兄は昭和十八年十二月十二日(日)南洋憲兵隊新設の派遣要員としての命を受け東京駅から東海道本線で旅立った。家族、それにごく身近かな親類縁者

とで見送った。これが今生の訣別となったのである。当時、既に戦局は苛烈の様相を呈しており、この戦争は容易ではない、との覚悟は抱いていた。

東京を発つてからの兄の一本は下関からの旅館からであった。そして最後の手紙(事実上の遺書)は翌年になってから間もなくで、決意を披瀝した父宛のもので「候文」となっていた。その間、幾便かの手紙が送られてきており、これらは、すべて現在私が責任をもって保管している。

公報は二月六日、クェゼリン島に於て戦死したことを報告しているが、これより以前、母は或る夜、不思議な夢を見たとき、朝直ちに家族に語っている。

それは、押入れに向った兄が、上半身裸体の立姿で、背を見せ、

(ほら、母さん、ほら、此処だよ、
ここ)

といった意味のことを口走った夢だっ

たという。母は絶対嘘を、また作り話を言うような人でないことは誰もが知っている。

後年、それも遺族会の会員になってかなり経た頃、会員のK氏のご好意から、クェゼリン島の全景航空写真を頂戴した。これを一見して母は驚き、

「あの夢の和夫の背中にあつたしみのようなものは、ちょうどこんな形をしていたよ」と語った。実に不思議な現象としか言いようがない。科学的には説明がつかない。我々は、何かという、短絡的に科学を提出し、その法則の範疇に強引に誘導して説明、解決しようとしがちだが、これは必ずしも適当ではないと、やっとこの年齢に至って思うようになった。さりとて

科学を軽視するわけではないが、それ一边倒に根拠を求めることは人間の驕慢さであろう。この世は円周率(π)のそのように、あくまで、どこまでも決して割り切れるものではないのだ。

今世紀最高の理論物理学者の一人と称されるアルバート・アインシュタインも

「宗教を伴わない科学は不具である」と語っている。

兄の霊魂は数千キロの距離、空間を一瞬のうちに飛越し、己の生命を授けてくれた優しい母に知らせ、その温かい懐に再び抱かれたく、脇目もふらず

“環礁座談会”の予告

当会は会員同志の交流を深めるために、島別座談会を企画し、平成三年四月にブラウン環礁関係者、昨年四月にクェゼリン島とエビゼ島関係者に懇談していただきました。

今年、四月十八日(日)にルオット島関係者の座談会を予定しております。参加を希望される方は同封の私製はがきの通信欄にその旨を御記入下さい。座談会の日時、場所が決定しましたら申込まれた方に洩れなくお知らせ致します。

環礁「ミレー抄」(17)

会友 成宮 芳三郎

(66警備隊軍医長)

葦原に葦の芽強く生ひ来しを
嵐のこの日つくつくと知る

椰子の葉の全けきものは見当らず
環礁ひとり仄白く見ゆ

砲台はみなくだかれて椰子の樹は
倒れしままに風に揺れ居り

熱帯の陽ざしまぶしく返しつつ
病院船の白き大きき

夢みればあすは便りのあるといふ
稚愚を笑はむ我ならなくに

ブラウン環礁の玉砕 (完)

矢野雄三

「中攻」隊—— ブラウン占領軍に一矢酬う

米巨大遠征軍が強行した「マーシャル作戦」は、米軍の「一方的な」勝利の裡に終わった。

その間、頼みとする聯合艦隊からは遂に「一艦一機」の来援もなく、わずか三週間ほどの間に、マーシャル群島の要衝クエゼリン・ブラウン両環礁を奪われてマーシャル全域が制圧され、中部太平洋防衛の最後の砦・トラック要塞(カロリン群島)もまた、不意を衝かれ完膚なきまでに叩きのめされて、完全にその機能を喪失した。

あえて作戦らしいものと言えば、敵占領後の両環礁に報復攻撃の一矢を酬うことで、辛うじて日本海軍の「意地」を示したことぐらいであろう。

二月十二日夜間、サイパンを発進したわが飛行艇六機がボナベ経由で、玉砕直後のクエゼリン環礁(ロイ島)を急襲、敵将スプルーアンスを驚かせた(前号参照)が、同様の報復攻撃計画は、ブラウン玉砕後のトラック基地でも密かに練られていた。

——後段の掲載写真は、米軍のエンチャビ島占領宣言(2月19日)から約二週間後の米軍による空撮だが、敵上陸直前の砲爆撃によって一面焦土と化したあの島(前号の写真参照)とは打って変わり、環礁中唯一の滑走路は修復され、占領軍兵舎や諸設備も短時間で急速に整備、すでに対日反攻の最前線基地に変貌を遂げている。

そしてその間、トラックの春島第一基地からかなり離れた、岩盤づくりの横穴式防空壕内に陣取った二二航空戦隊司令部では、先任参謀・花木清澄中佐提案の「ブラウン報復攻撃」が、いよいよ決行の時を迎えようとしていた。敵のトラック大空襲以来、初めての反撃作戦である。

三月一日(ブラウン全体が完全に敵手に落ちた2月23日から約一週間後)、トラック基地から初めて一航戦の偵察機が発進してブラウンに向かい、潜水艦も潜航偵察に加わった。

以前にも引用したことのある『真田稷一郎少将日記』には、こう記されている。

三月二日 ○九二五、ブラウン写真偵察巡洋艦二、駆逐艦五ツノ他在泊、エン

チャビ飛行場へ使用中、エニウエトク島二二〇〇米ノ滑走路造成中。
三月五日 「呂百六十潜」ブラウン偵察巡洋艦、駆逐艦等在泊、空母ヲ認メズ

そして、この報復攻撃の陣頭指揮をとったのは、ペリリュー基地から、新たに改編された「攻撃第七〇七飛行隊」(四〇中隊)を率いて到着したばかりの巖谷二三男少佐であった。

同氏は戦後、その著『中攻』(注・海軍中型攻撃機)の中で、当時の状況を次のように伝えている。

当初は、トラック兵力のすべて——四〇中隊で決行しようという提案もあったが、もし失敗すると翌日から哨戒機さえトラックには無くなってしまふ。結局、半分の二〇中隊18機で敵情明瞭になり次第決行ということに落ち着いた。昭和十八年後半以来の半歳余は大被害が打ち続き、中攻の士気も次第に沈滞気味となっている時、たとえ大戦果は期待できないまでも、積極的な戦闘をやるうとする意志だけでも發揮する必要がある。三月四日、四人の中隊長を集めてブラウン攻撃計画を話し、この攻撃には兵学校出身の若い同期生上田・近藤両中隊長が当たることとし、日施哨戒は野村特務大尉、飯島特務中尉の両中隊で実施することに定めた。(『中攻』より抄録)

三月八日午前、マーシャル方面配備の潜水艦から「エンチャビ飛行場ニハ小型機多数アリ、礁湖内ニハ輸送空母ヲ含む船団約四〇隻方荷役中、エニウエトク飛行場ニハ敵影ヲ見ズ」との偵察情報が入る——。巖谷少佐は直ちに攻撃隊を二分し、上田中隊主力6機を

爆撃隊としてエンチャビ飛行場へ、近藤中隊と上田中隊3機の計11機を雷撃隊に仕立てて、礁湖内の艦船攻撃に当てることにした。

翌九日午後六時、日没少し前、先発の上田隊6機が六〇珣爆弾各12個を搭載して発進、巖谷少佐率いる雷撃隊11機(出発時の故障で9機が出動)も、暮色のたれこめた基地をあとに、上田隊の後を追った。天候は良く、攻撃隊は一条乱れぬ編隊を組んで北東の方ブラウンへ向かって進撃した。

——奇襲は成功、全機揃ってトラック基地に帰投した。

エンチャビ島の火災は、六〇連離れた洋上からも空が紅く見えるほどの大火災になっていた。私は、約二週間前、青山英夫大佐の指揮する五〇〇〇名に近い海軍陸戦隊と設営隊の人々が、敵の上陸を迎えて奮戦玉砕したその恨みをはらすことが出来て、ささやかな満足感にひたっていた。(同著/傍線筆者)

海軍機搭乗員

「玉砕寸前」に脱出

——米軍上陸開始寸前のブラウンで成功した、一つの「救出作戦」にも触れておこう。

同年二月上旬、米巨大遠征軍が突如「蛙飛び」にクエゼリン環礁に襲いかかったとき、マーシャル群島全域のわが航空戦力はすでに壊滅的な打撃を蒙っており、クエゼリン以外の航空基地

には、飛ぶに翼なき約二〇〇名の海軍機搭乗員が取り残されていた。

聯合艦隊司令長官は二月一日、「信令作第一二号」を発してマーシャル方面に残留の搭乗員救出を命じ、翌二日には内地にあつた八〇一空の二式飛行艇のすべてを三日中にトラックに集結させ、現地の八〇二空と協力して五日以内にトラックまで収容するよう、下令した。

同月五日、ウオッセへ飛び立った飛行艇2機が搭乗員四〇名を収容、マロエラップへは陸攻3機(36名収容)が発進した。エンチャビ島にも、同日夜間、飛行艇2機が着水して六二名を収容したが、日増しに熾烈化の度を加えるブラウンへの連続空爆→ブラウン孤立化を前にして、翌六日さらに飛行艇3機が同環礁への物資投下を兼ねて、エンチャビ島から一二〇名を救出、翌七日も同2機がメリレン島の三〇名救出に成功。辛うじて、玉砕戦からの脱出を果たしている。

二月四日、敵を夜間空襲してブラウン基地に帰った樺澤特務中尉によると——
「その翌朝早く敵機の来襲を受け、所在5機全部が爆破されました。エンチャビ島は、滑走路一本のほか何もない珊瑚礁だったので、残った搭乗員は滑走路の一端の石崖下を唯一の避退地として、終日そこで空襲を避け、夜間環礁内の水面に着水した飛行艇により救出された」という。(『中攻』より抄録)

辛くも事前に無事救出された搭乗員

と、来援の望みもないまま放置された守備隊将兵たち——、この大きく明暗を分けた二つの現実からこそ、戦争のもつ「非情さ」があると言うべきだろう。そして、幸いトラック基地に救出された搭乗員たちが、その後いかなる運命をたどったかも詳らかではない。

陸兵は——、 正しく「天聴」に達したのか

とはいえ、中攻隊によるブラウン奇襲報復は、クエゼリンの場合と同様、ささやかながらも玉砕将兵たちの霊を慰める「弔い合戦」となった。

トラック基地は、久々に快哉を叫ぶことが出来た。翌日、司令部から「この攻撃は軍令部総長を経て天聴に達し、総長は椅子を賜わって御嘉賞の御言葉を頂いた」と伝えてきた。(『中攻』より抄録)

『防衛庁公刊戦史』第71巻「大本営海軍部・聯合艦隊A5V」にも、こう記されている。

I 艦型不詳一隻撃沈、大巡二隻に各魚雷一発命中。

II 陸攻8機はエンチャビ飛行場を攻撃十数カ所に火災、誘爆により飛行場一面に大火災を確認。

III 陸攻5機は、エニウエトク飛行場を攻撃、六カ所に火災を生ぜしめた。

本攻撃について十一日、軍令部総長が奏上し、陛下から満足のお言葉があつた。軍令部次長はその事を電報するとともに、この種の作戦につき配慮指導されるよう聯合艦隊に要望した。

その後、三月二十三日、軍令部の戦況上奏後、陛下から「航空機はもつと補充出来ぬか、ブラウンは奪回できぬか」との御下問があり、総長は「要地攻略は容易ではない。クエゼリンには三〇師団があり、目下研究中」と奉答した。
また二十八日には、陛下から重ねて「ブラウンの奇襲のごとき更にできないか」との御下問を受け、軍令部内に対し、これと関連してマーシャル、ソロモン、ニューギニア方面作戦において、小舟艇をもつてする積極的奇襲作戦を企図するよう指示した。(四四一ページ/傍線筆者)

——果たして、再度のブラウン奇襲は強行されたのか。『中攻』から引用しよう。

この奇襲に気を良くした二二航空戦隊司令部はエニウエトク基地から発進するB24の夜間空襲が次第に激しさを加えてきたこともあって、再びブラウン環礁の爆撃をもちかけてきた。私は「今度は成功しませんよ」と花木参謀に答えたが、結局二二小隊6機の爆撃が命じられた。三月末のある日、六〇近爆弾各12個を積んだ攻撃隊は、安土中尉機(近藤大尉の後任)ほか2機を先頭に、三〇分の間隔をおいて来援の攻撃第七〇一飛行隊の分隊長以下3機が、ブラウンに向かって発進した。(中略)発進四時間後、安土機から「我空戦中」と打電あり、その他数機が同文の電文を発進したまま連絡を絶ち、翌朝になつても全機が帰らなかつた。米軍は、第一回のブラウン攻撃後、電探をはじめ夜間戦闘機の整備を急ぎ、それがほぼ完成したとき安土機以下が遭遇して、全滅させられたものと推定された。司令部は、二度とブラウン攻撃を命じなかつた。(同著より抄録)

——ここで、注目しなければならぬのは、その時期のトラックがなお、「第四艦隊司令部」の根拠地であり、ブラウンに最も近い中部太平洋上の最前線にあつたという点である。

勇躍、報復攻撃の直接指揮をとられた巖谷少佐さえ、戦後も(『中攻』の初版発行は51年9月)ブラウン環礁に散つた守備隊主力が、まぎれもない「陸軍部隊」である事実を、ご存知なかつたことになるからだ。

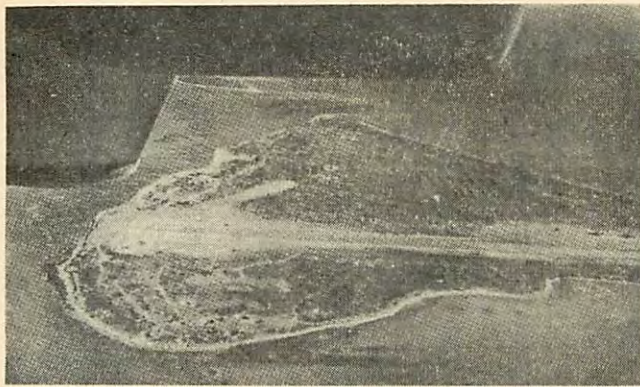
それだけに、この時期、南海の珊瑚礁を血に染めて玉砕していった離島守備隊が、海兵にあらずして、「海上機動第一旅団」という名の「陸兵」であつたことが、果たして誤りなく「天聴」に達していたのかどうか——。かすかな疑問がよぎるのを禁じ得ない。

ただ、少なくとも「ブラウンの玉砕」という動かし難い事実が、すでに報復攻撃開始前の海・空の偵察によって、十分「視認」できたことを立証し得るこれらの史料には、きわめて重要な意味がある。

何故に、大本営発表は

“差し止め”られたのか

——ともかく、アッツ島、タラワ・マキン、クエゼリン・ルオットに続く第四の「離島玉砕戦」は、終わりを告げた。



米軍占領後のエンチャビ島 (19年3月上旬、米軍資料より)

だが、それ以前も、またそれ以後の離島玉砕も洩れなく報道した『大本営発表』が、何故かこのブラウン玉砕とグリーン島玉砕(2月15日、ラバウル東方二〇〇名)の事実だけは「未発表」のまま終わったことは、富永謙吾氏の著書『大本営発表の真相史』(環礁50号・連載①参照)によっても、明らかである。

ただ、その理由として『両島の玉砕がマキン・タラワの玉砕と時期が同じであったためと、当時の状況が全く不明であったため、空しく埋もれること

になった』(連載②参照)としておられることには、大いに疑義がある。

クゼリン・ルオットの玉砕とあるべきところを、タラワ・マキン(18年12月20日玉砕)と誤認されたのはともかく、『当時状況全く不明のため』という所説には、断じて承服できない。

ブラウン失陥後の海・空からの偵察行動、あのブラウン報復攻撃、軍令部総長の再度にわたる上奏、そして陛下の優渥な「お言葉」など——のついに、まぎれもない「玉砕の事実」が存在するからだ。

——では何故、この玉砕戦のみが、異例の発表「差し止め」の憂き目を見ることになったのであろうか。

ここに再び、『防衛庁公刊戦史』第6巻「中部太平洋陸軍作戦(八)ⅠⅣマリアナ玉砕まで」の記述を、引用する。

「大本営は二月二十五日クゼリン・ルオットの玉砕を発表したが、ブラウン島の玉砕については、国内に与える士気上の影響を心配してか、とうとう未発表に終わった」(二六九ページ/傍線筆者)

微妙な表現ながら、著者もまた一種の疑問を投げかけておられる。

というのも、当時を再現してまず指摘できることは——、日本海軍があれほど呼号した中部太平洋上の要衝トラックが「逆真珠湾」とも言われた二月十七〜十八日両日にわたる米巨大遠征軍の上空襲を前にして、全く為すところなく、信じ難い「大敗北」を喫した

ことである。大本営作戦首脳部に与えた衝撃波は、計り知れないものがあつたはずだ。

しかも、トラックを叩いたミッチャー1提督指揮のニコ空母群が、引き続きさらにわが防衛線深くマリアナ諸島にまで侵入し、所在のわが航空兵力は、またしても壊滅的な打撃(2月23日)を余儀なくされた。二月下旬にして早くも、わが「絶対国防圏」の要衝にまで敵手が伸びてきたということだ。

陸海作戦首脳部は、二月十九日(米軍のエンチャビ上陸作戦のさなか)、周章しく爾後の情勢検討を行なっているが、まさか、トラック奇襲後わずか数日のうちに、優勢な敵機動部隊が長駆マリアナまで急襲してこようとは、夢想だにしなかったことであろう。

軍中央は、まさに開戦以来の「大混乱」に陥り、陸軍の海軍に対する「不信」もその極に達したと想像される。

加えて、ブラウン玉砕戦最終段階の二月二十一日には、東條首相・陸軍大臣が遂に「参謀総長」まで兼務するといふ、まさに建軍以来の非常措置が強行された。それによって、軍中央に新たな地殻変動が起こりつつあったことも、混乱の度を一層深める要因となつたに違いない。

とても、南海の一離島の玉砕に冷静に対応する余裕などなかったという弁明もあろうが、だからと言って、大本営発表「差し止め」の措置に踏み切っ

たのは、決して「一般国民に対する士気上の配慮」といった綺麗事で逃げて済ませ得る問題ではない。

あくまでも、陸海作戦指導部のたび重なる誤判断を隠蔽し、両者の亀裂と混乱とが生み出した国軍全体に与える「士気上の影響」を慮っての秘匿行為だったとみるのが、至当であろう。

意図的な、余りにも無責任かつ理不尽な所業と解釈せざるを得ない。

——こうして、日本の太平洋支配にとどめを刺したとまで言われた「ブラウンの攻防」と、守備隊将兵「玉砕」の事実は、遂に一般国民には知らされず、守備隊将兵は「無名戦士」さながらに、虚しく葬り去られることになったのである。

エンチャビが、 世界初の「水爆実験場」に

——ブラウン守備隊の悲劇は、それだけにはとどまらなかつた。

失陥後のブラウン環礁は、米軍が使用していた「エニウエトク環礁」が一般的呼称となり、知る人ぞ知る「幻の環礁」となってしまった。それだけではない。戦後間もなく、同じマーシャル群島の「ビキニ環礁」とともに米軍の「核実験場」に供されるといふ、数奇な運命をたどっていくのである。

今日なお、ビキニの名が、多くの日本人の記憶に残っているのは、たまた

まその東方一六〇軒の海域で操業中だったマグロはえ縄漁船「第五福竜丸」(乗組員 23 名)の被爆と、いわゆる「原爆マグロ」事件によってだが、反面、エニウエトク(ブラウン)がビキニを上回る原水爆実験の生け贄となったことを知る人は、決して多くはない。

一九四六年(終戦の翌年)から一九五八年(昭和 33 年)にかけて、この二つの環礁では合計 66 回もの核実験が強行されたが、ビキニの 23 回(うち水爆実験が 2 回)に対し、エニウエトクでのそれは 43 回(水爆 3 回)に達した。

エニウエトクにおける実験は、環礁北部の島々で実施され、中でも日本軍守備隊が想像を絶する砲撃にさらされた「エンチャビ島」が、その中心的役割を担わされた。米軍占領後も、環礁中の最重要基地として一時期最大の人口を有したこの島は、地上実験 3 回近くの島での実験 7 回——計 10 回もの核爆発によって、まさに「死の島」と化してしまつたのである。

とくに一九五二年十一月一日、世界で初めて米国が実験した「水素爆弾」(マイク一〇・四 Mt、広島型原爆の八〇〇倍の威力をもつ)は、エンチャビ島の海鳥と卵の捕獲地・エルゲラップ島に仕掛けられ、その巨大な核爆発によって、同島は一瞬にして跡形もなく消し飛んだという。

その後に行なわれた放射能測定によると、エンチャビ島では、一時間当た

り実に三五〇レム(自然放射能は年間で一〇〇ミリレム)という、驚異的な放射線照射量が記録されている。

米国防総省は一九七八年九月、エニウエトク環礁での大掛かりな放射能除去作戦(クリーン・アップ・オペレーション)の実施状況を内外記者団に初公開したが、その総予算二〇〇〇万ドルは、ビキニの場合(一二〇万ドル)の約一六倍にもほり、いかにその汚染が深刻だったかを物語っている。

二つの「ブラウン報道」の狭間に想う

ところで、平成三年の五月から八月にかけて、ブラウン玉砕に関連する二つの「報道」が相次いだ。

「朝日新聞」(7月28日朝刊)8月14日夕刊まで計六回の報道特集と、「山形テレビ」(5月25日放映の特別報道番組)の両社によるものだ。

いずれも、その前年八月に、山形県鶴岡市に本部を置く民間団体「全国抑留者補償協議会」(全抑協)で偶然に見つかった「ブラウン玉砕者名簿」が引き金で、そこに日本人軍属五五名と共々に連記されている、朝鮮半島出身の軍属二三五名の「追跡調査」を主要テーマとしたものだ。

名簿には、朝鮮人軍属の所属部隊、氏名(日本名に創氏改名)、生年月日、本籍、採用年月日など、克明に記載さ

れていた。

確かに、ブラウン環礁には昭和十七年以来、朝鮮半島出身者を中心とする軍属三〇一名が送り込まれ、エンチャビ島飛行場など軍事施設の建設に従事しており、不運にも十九年二月のブラウン玉砕戦に巻き込まれて、在島の守備隊将兵と運命を共にしている。

取材の過程では、朝日の企画報道室・松井覚進氏、山形テレビ報道記者・大塚大介氏から協力要請があり、また松井氏の懇望で、千葉県千倉町在住の黒川正義氏(エンチャビ島から奇跡的に脱出後、米軍補虜となる)を現地に訪ね、貴重な証言を得ることができたのは、私の「ブラウン考証」にとっても、一つの収穫だった。朝日の掲載第一回の社会面に登場した黒川氏が、それである。

同紙の場合は、韓国取材を東亜日報に依頼し、玉砕現地にはカメラマン帯同で松井氏自身が飛び、単に朝鮮人軍属問題に止まらず、ブラウンからクェゼリン、ミリ環礁へも取材の輪を広げ、マーンシャル群島各地に大戦の痕跡を探ろうとするものだった。

一方、山形テレビが放映した「悲しみは消えない・韓国人玉砕者名簿を追う」と題する特別報道番組は、二三五人中一三九人が強制連行された韓国「全羅北道」に精力的な取材を展開——。そこに赤裸々に映し出された韓国人遺族たちの「悲嘆と憤り」には、深く

胸打たれるものがあった。

とくに、一人息子の戦死を初めて知らされた八九歳の老母が、「知らなかったからこそ、今日まで生きてこれたのに……」と泣き崩れる姿には、民族を超えて、人間としての激しい哀切の念に涙せざるにはおられなかった。

——番組は最後に、三ヶ根山上に建つ「満州第八〇五部隊」(海上機動第一旅団第三大隊)の「慰霊碑」をゆくりとズームアップしながら、次のようなナレーションで終わっていた。

「来年二月には、厚生省の呼びかけで日本人遺族のブラウン慰霊が実現する。だが、韓国人遺族の多くは、あの日、あの島で日本軍として玉砕していった肉親の消息すら、今なお知らされていない」

さすが、テレビ報道部門で平成三年度の日本民間放送連盟賞、東北・北海道ブロック最優秀作品に選ばれたというだけあって、その映像が訴えかける迫真力には、率直にいつて感動した。

だが、それが力作だけに、そもそも「ブラウンの玉砕」そのものが、日本人遺族の多くにとって今日なお多分にペールに包まれた「異例の玉砕」なのだ、という現実にも少しく光を当ててくれたら——という想いが尾を引いた。

いまさら多くは語れないが、ブラウンの玉砕は、われわれ日本人遺族の上にも、今なお大きな「爪跡」を遺しているからである。(おわり)

靖国神社秋季例大祭盛大に斎行

(靖国神社社報「靖国」四四九号より転載)

境内の樹々が美しく色づきはじめ、五百余鉢の大輪菊花が咲き薫る神苑。靖国神社秋季例大祭は、去る十月十七日から十九日まで三日間に亘って盛大且つ厳肅に執り行われた。

大祭初日の十七日夜、浄闇冷気の中

に第十七回目の霊璽奉安祭が厳肅に行われ、新たに百四十六柱の神霊が御本殿正床に奉遷された。

また十八日当日祭には勅使が参向、天皇陛下からの御幣物が捧げられ、十九日には、皇族方が御参拝遊ばされた。

勅使園池美作掌典参向

祭典は十七日午後三時、大祭奉仕員と神城、諸具を祓い清める「清祓」から始まった。

秋晴れの翌十八日、当日祭は、午前十時に大野宮司以下祭員が御本殿に参進。国学院大学吹奏楽部の「国の鎮」を奏するなか御内陣の御扉が開かれ、神饌五十台が供えられた。

次いで、宮司祝詞を奏上、終りて参列者一同謹んでお迎え申し上げる中、勅使として園池美作掌典参向。御幣物を奉り、大御心のままに御祭文を奏上、玉串を捧げて拝礼の後退下された。

続いて国学院大学フォイエルコール合唱団による鎮魂頌の献楽、特別参列者の玉串拝礼。その後、宮司は参列者に対し御挨拶を申し述べ、祭典は滞りなく終了した。

皇族方御参拝

第二日祭の午後一時半、常陸宮殿下、三笠宮妃殿下、三笠宮寛仁親王殿下、高円宮同妃殿下が到着殿に御参着。御少憩の後御揃いで御昇殿、玉串を捧げて拝礼。次いで拝殿にてお迎えの御遺族・崇敬者に親しくお言葉をかけられた。

各界代表参拝
当日祭には、末廣栄日本遺族会会長代理、井本臺吉英霊にこたえる会会長、白井正辰靖国神社奉賛会会長代理、古屋哲男崇敬者総代、松平永芳前宮司をはじめ、各界代表や全国から参集された御遺族・崇敬者六百三十名が拝殿狭しと参列。第二日祭には、森田康之助崇敬者総代をはじめ御遺族・戦友・崇敬者四百四十名が参列した。また十九日午後二時半、「みんなで靖国神社に参拝する国会議員の会」(橋本龍太郎会長)百五十二名(代理含む)が昇殿参拝を行った。

大祭期間中の閣僚参拝は、伊江朝雄北海道・沖縄開発庁長官、谷川寛三科学校術庁長官、宮下創平防衛庁長官の三名であった。

千鳥ヶ淵 秋季慰霊祭

戦没者墓苑



千鳥ヶ淵戦没者墓苑奉仕会主催の終戦四十七周年の秋季慰霊祭は、十月二十一日(水)、前日迄続いた長雨も納まり、爽やかな秋日和に恵まれたここ墓苑において、皇太子殿下の御臨席を仰ぎ、内閣総理大臣代理、参議院議長、厚生大臣、防衛庁長官、環境、科学技術両庁長官代理、自民、社会、公明、民社各政党代表を始め、都道府県知事代理、遺族会、戦友会代表、各協賛団体代表、陸海空自衛隊の代表部隊、更に高校生等千数百名参列のもとに挙行された。
(奉仕会会報より転載)

杵き雲の下で (完)

戦いの記録

会友 平林 和夫

副長が、自分の持っている軍機書類を私に処分するよう命じられた。深さ二〇センチ、幅三〇センチ、奥行二〇センチ、鍵をつけた頑丈な木箱一箇。

そのころは、海上からの砲撃と飛行機からの掃射銃撃と、実に連絡よく交互にくり返されていた。やとと壕から出る「きっかけ」をつかんで、副官部横の防空壕に着いた。

烹炊所まで僅か三〇メートルの距離なのだが、障害物が多すぎて思うように走れない。銃撃の機が動くものを見つけるとすばやくねらってくる。掃射

の機銃がざあっと水を落とすように頭の上に来る。皆しゃがんだ。
「渡辺は副官部を呼んで来い。他の者は書類を窠にくべろ」勿論烹炊所は全部大破していた。足のふみ場もなく、大小の柱や板がふきとび乱れ散っていた。が窠はレンガ造りなので、とにかく形を保っていた。私らは書類をほくしては窠に入れた。

間もなく、副官部の兵隊や、江口主計少尉や、川崎主計兵曹長なども烹炊所に来た。「敵はルオットに上陸を始めています。こゝにも今日明日に、あが

るものと思われる。命によって、詔勅・軍機書類・人秘書類は俺が燃やす。皆手分けをして、どんな書類も全部燃やせ」

詔勅の箱は、緑の緒をかけた白木の箱である。その箱を開くと黄色の布に包んで、更に一つの箱があった。実のところ、私はその箱を開いたのは、このときが初めてであった。

中の箱は、菊のご紋章が燦然と輝き、顔が写るようなびかびかに光った、黒のうるし塗であった。「……」一瞬、言葉を呑んだ。「これを燃やすのか」と考えると、情けなさど憤りが、身体の上から下までつきぬけた。

渡辺が「これも燃やすんですか」と、ふるえるような声で念を押した。私はそれを押し戴いて、中から詔勅を出して謹んで窠にいれた。軍人勅諭と、宣戦の大詔が納められてあった。そして終りにその光り輝く、ご紋のうるしの箱を窠に入れた。

最後に人秘書類を燃やした。士官准士官の奉職履歴書・進級・論功・叙位叙勲賞罰の書類は、庶務主任が直接保管し、事務を執っていたのである。

海軍では、全員の奉職履歴書の制度があった。士官は直接本省に、特務士官以下は各所管の鎮守府に、履歴本簿をおき、副本を服務先において、転勤の毎に、副本は追加記註されながら、本人について廻るのである。

そして窠の中に残っている書類を、

火箸でほぐしほぐし完全に燃やした。

すっかり玉砕を覚悟しながら、窠の火を消したり、或いは銃撃の際に身をかわめるのは、どうした意味か、意識していたとも言えるし、無意識のようでもあった。がそれはともかく、その時にはそれが自然の動作であった。

書類を燃やすのに、二時間を要した。報告の為に司令の所へ向う。飛行場の滑走路の真中の防空壕は、目の前に見えていたが、中々思うように駆けられなかった。到るところに爆弾の穴だ。障害物がとんでいる。腹がへって力が

入らなくて、走れない。時限爆弾が馬鹿に多くて、ぴん、と冲天に砂を吹き上げる。その度にその音が腹にこたえ、「ぴりっ」とくる。耳を圧して「ぴん」と鳴る。近いときには伏せをした。まわり中に小石が、雨のように落ちてくる。その小石の風を切る音が、「ひゅーっ」と音を出す。まるで全部が自分に落ちてくるか、と思える程降りかかってくる。

ようやく壕に着く。そこでも、赤い表紙の図書類(機密の図書は赤表紙であった)を燃やしていた。

信頼する上官の傍に出て、無性に力強さを感じて安心した。それから形をあらためて「機密書類の処分宜し。詔勅・軍機書類・人秘書類・官印は、私が確実に焼却致しました。司令の私室も整理致しました。副長に「副長の軍機書類は、確実に私が焼却致しました。」

司令達はじっと聞いて下さった。

私は南部でデマのように飛び交っている数々の情報めいた話題について一々副長に確かめた。それを今思い出すまゝに列挙しておく。当時の島の空気を、思い出すがのの一つとして。

何故ならそれらのデマ情報は、「為にする」「悪意」から出たものは一つもなく、総てが皇軍の必勝を信じ、戦局の打開を祈る切実な念願から出る、心の叫びであったからである。

一、クェゼリン・ルオットでは、敵上陸軍を撃退してしまった。(虚報)

二、ヤルトに上陸したらしい。水上艦艇を大半やっった。(虚報)

三、味方機動部隊が出撃した。(虚報)

四、昨夜潜水艦が、この沖を通過して、信号をした。(確実)

五、西方海上で敵巡洋艦が撃沈された。(虚報)

六、西方沖で七機が敵艦に突入した。敵艦は対空砲火を集中して、応戦していたのが見えた。(虚報)

七、味方編隊が二十機以上、西方上空遙かに攻撃に行くのを見た。(虚報)

八、明日ここに飛行機が来る。零戦と一式陸攻が来る。(虚報)等々。

確実であったのは、潜水艦が沖合を通ったものだけであった。一時浮上して発火信号で、輪をかいたそうである。壕のすぐ前の道路に、行軍釜をすえて銀飯(麦を加えない白米飯)が炊かれた。炊きたてをすぐ握るので、熱くて掌をやけどしそうであった。皆の気持ちがあつたと一致して「有難い」と思った。快かった。むしろたのしかった。こんなにすっぱりとした未練のないよい気持は、かつて経験したことがなかった。「こんなよい気持を味わったなら、以って、生きてきた甲斐があるな」そう思った。

配食している間、もう一度書類焼場に行って見た。どうしたわけか、「海軍主計中尉 平林和夫」と印刷した私の名刺が、三・四枚散っていた。私は「こんなものが残っているのは、しゃくだ」とそれを、火に入れた。

名刺は、汚れていなかった。敵の上陸戦に備えて、このような状景を展げた、わがマロエラップ島には敵の上陸はなかった。

以後終戦までこの小さな島に、わが方から唯一度の、飛行機・兵器・弾薬の補充も、人員増強も食料補給も、一切の応援はついに行われなかった。

かくしてわれらのまる二年間にわたる「苦悩の糧食戦」がはじまるのだ。それにしても、ながく書かれた枚数は多いが、日数にすると、わずか一月

三十日、三十一日、二月一日の三日間その前後を入れても、せいぜい四・五日間のことであった。おそらく私にとっても、その島にいた多くの戦友にとっても、生涯のうち「最もながい日」になったにちがいない。(終)

東海の聖地

三ヶ根山

三ヶ根山は、愛知県南部の幡豆郡に位置している。標高は三二六米だが、眼下に三河湾が広がり、渥美半島、知多半島を一望に収める景勝地である。三ヶ根山とは、もと、三ヶ根観音太山寺の山号であり、それが山の名になったという。

三ヶ根観音は、一二〇〇年前の聖武天皇の御代、行基菩薩の作になる聖観音菩薩を本尊として万民の信仰をあつめていた。

比島観音は太山寺境内にあり、フィリピン戦に散った軍人、軍属、在留邦人等五十万人の霊を供養し、世界平和と日比親善を祈念して、遺族と戦友の手により昭和四十七年に建立された。

三ヶ根観音



大東亜戦争の戦勝国は、極東国際軍事裁判で、東條英機大将はじめ七名をA級戦争犯罪人として処刑したが、これは軍事占領下に占領軍が一方的に行ったことで日本の裁判によって裁かれたものではなかった。

昭和二十七年四月、講和条約発効後、全国から澎湃として、「戦犯赦免勧告運動」が起こり、衆・参両議院に於て超党派圧倒的多数で、同年十二月議決された。

翌、二十八年八月、左右両派社会党を含む全会一致で「遺族援護法」が改正され、「いわゆる『戦犯』の名のもとに病死、或いは刑をうけ非業な最期を遂げられた方々は全く我が国の刑法に抵触せず、戦死、戦病死者と全く同じに取り扱われる。」ことになった。

よってこれらの方々は厚生省から靖国神社に合祀資格者として通知され、逐次合祀されたのである。東條大将以下七柱の御遺骨の一部は有志のお骨折りによって、この三ヶ根山上の奥津城



関東軍独立守備隊歩兵第十六大隊 (通称満洲第八〇五部隊)

に手あつく奉斎されている。

七士の墓の傍に次の碑文がある。

『米國の原子爆弾使用ソ連の不可侵條約破棄物資の不足などにより敗戦のやむなきに至つた日本の行爲を米中英ソ濠加佛蘭新蘭印比十一ヶ國は極東國際軍事裁判を開き事後法によりて審判し票決により昭和二十三年十二月二十三日未明、土肥原賢二 松井石根 東條英機 武藤章 板垣征四郎 廣田弘毅 木村兵太郎七士の絞首刑を執行した』

関東軍独立守備隊歩兵第十一大隊



横濱市久保山火葬場よりその遺骨を取って熱海市伊豆山に安置していた三文字正平辯護士は幡豆町の好意によりこれを三ヶ根山頂に埋葬し遺族の同意と清瀬一郎 菅原裕両辯護士等多数有志の賛同を得て墓石を建立した

遙かに遠く眼を海の彼方にやりながら太平洋戦争の眞因を探索して恒久平和の確立に努めたいものである』
三ヶ根山上の慰靈碑のうち本会の関係は次の二部隊である。

① 関東軍独立守備隊歩兵第十六大隊

海上機動第一旅団第三大隊Ⅱ大隊長 矢野俊雄大佐Ⅱに改編。一部はクエ

ゼリン島、一部はブラウン環礁のエンチャビ島に於て玉碎

昭和五十六年十月十八日建立

△連絡、照会先▽

〒188 東京都田無市西原町四一三一四

七 西原グリーンハイッツ七一五〇四

矢野 雄 三

〒042 四二四一六七一三六三九

② 関東軍独立守備隊歩兵第十一大隊

海上機動第一旅団第一大隊Ⅱ大隊長 橋田正弘中佐Ⅱに改編。ブラウン環

礁ブラウン島(現エニウエタツク島)に於て玉碎

昭和五十九年四月二十三日建立

△連絡、照会先▽

〒445 愛知県西尾市上町作道屋敷八

太田 小太郎

〒056 五三三―五四一―三三〇九

※毎年四月二十三日に墓前祭齋行

名 簿 訂 正

(3) ◎ 平成 3 年 8 月 15 日発行の会員名簿を次のとおり訂正いたします。

<頁>	<氏 名>	<訂 正 事 項>
23	楢 館 庄 蔵	続柄を弟に訂正
24	平 形 いせこ	戦歿地をエビゼに訂正
26	秋 保 十 郎	TEL 0236-53-3458 に訂正
	江 間 正二郎	住所の中八角を削除
	坂 本 キヨ子	戦歿地をトラワに訂正
27	吉 津 ミドリ	〒を 968-04 に訂正 TEL0241-84-2006 を加入
28	村 田 久	戦歿年月日を 18.9.19 に訂正
29	斉 藤 勲	TEL0274-74-9128 に訂正
31	橋 本 強	戦歿年月日 20.6.1 を加入
33	倉 田 茂 弘	〒299-43 千葉県長生郡一宮町一宮4287-7 戦歿者倉田敏彦、続柄弟、所属部隊不明、戦歿年月日 19.2.6
36	小 山 キミ子	戦歿年月日を 19.2.6 に訂正
37	鈴 木 梅太郎	戦歿年月日を 19.2.6 に訂正
43	糺 谷 友 孝	〒242 大和市上和田1775-10 TEL0462-69-7454 戦歿者糺谷玄重、続柄長男、所属部隊八海山丸、戦歿年月日 17.10.22 戦歿地ギルバート <新入会>
45	吉 田 正 次	〒248 鎌倉市稲村ガ崎5-27-6 TEL0467-31-5495 戦歿者吉田順一郎、続柄弟、所属部隊不明 戦歿年月日 19.2.24 戦歿地ブラウン<新入会>
49	青 木 謹 次 薫	平成 4 年 3 月死亡のため退会 〒939 富山市城新町13-7 戦歿者室田角衛、続柄弟、所属部隊不明、戦歿年月日 19.2.24 戦歿地ブラウン<新入会>
53	畑 中 しま子	続柄姉に訂正
58	山 形 雅 俊	住所神戸市東灘区岡本5-4-22 に変更
59	藤 原 照 子	死亡のため和治が継承(同住所)
64	伊 藤 梅 子	TEL0897-56-7257 に訂正
67	西 原 康 雄	〒822-01 に訂正
68	松 本 房 枝	〒802 北九州市小倉北区小文字2-9-5 TEL093-551-4273 続柄妹、所属部隊不明、戦歿年月日 19.2.6 戦歿地クェゼリン<新入会>
70	前 田 フ サ	住所諫早市に訂正
71	鬼 海 富 夫	戦歿年月日 19.2.6 に訂正
73	揚 野 サツエ	住所を枕崎市西本町124 に変更
74	森 野 テル子	住所を〒859-06 長崎県西彼杵郡吉無田郷1488-144 に変更
75	宮 城 カマド	住所 沖縄市宇上地1030-2 屋比久方 TEL098-932-9896 に変更
76	石 渡 弘 讓	〒158 世田谷区上用賀3-3-16 TEL03-3700-6060 (備考)軍艦長良<新入会>
	大矢野 謙 弘	〒860 熊本市花園7-26-20 TEL096-365-2660 (備考)クェゼリン6潜基<新入会>
77	鈴 木 寅 雄	平成 4 年 3 月死亡のため退会
	高 田 源次郎	TEL0865-64-2069 に変更
78	橋 本 岩 樹	〒731-01 広島市安佐南区祇園町西山本105-10 TEL082-874-1320 (備考)海軍航空隊 <新入会>
	平 林 和 夫	TEL0772-82-0734 に訂正

本部だより

☆五十年祭を盛大に!

明年はクェゼリン、ルオット、ブラウンの玉砕から五十年になりますので、平成六年三月二十七日に敵肅かつ盛大に五十年祭を執り行うこととしました。会員皆様の御意見をもとにして企画しますので、本年三月二十八日の総会の時までに御意見をお寄せいただきますよう存じます。

☆環礁合併本第6集刊行

環礁51号から58号までの合併本を作ります。今回は受注生産としますので本号に同封した振替用紙の通信欄で、お申込み下さい。尚、合併本の第1集から第5集も若干在庫がありますので、御希望の方はお申込み下さい。代価は第1集から第6集まで、製作原価を大幅に下まわる一部一三一〇円(送料共)です。

☆タラワ墓参

ギルバート五十回忌の年に際して現地墓参を希望する声がありましたので、57号で御案内しましたが、申込者僅少のため団体としての墓参は取止めとなりました。

☆お便りをお寄せ下さい

この「環礁」は同じ境遇の仲間たちの心のふれ合いの場としてお気軽に御利用下さい。身のまわりのこと、趣味やレクリエーションのこと、この会に

対する率直な注文等何なりとお寄せ下さい。原稿は原則としてお返ししておられませんので、返却を要するものはその旨を書き添えて下さい。採否と多少の手直しはあらかじめ御了承下さい。

☆入会のおすすぬ

本会は、会費を納めた方だけを会員として登録し二月と八月に会報「環 礎」をお届けしております。

寄付者芳名

(敬称略・順不同)

次の会員及び会友の皆様は年度会費を完納された上更に慰霊奉賛のため浄財を御寄付下さいました。厚く御礼を申し上げます。

今後とも本会の永年存続のため何分の御協賛を切にお願い申し上げます。

- ◇北海道 伊藤 フジ 吉田 貫治
- ◇青森県 田中 正治
- ◇山形県 秋保 十郎
- ◇福島県 三浦 一郎
- ◇千葉県 宮崎 實
- ◇東京都 中田 テル 出口 スエ
- ◇神奈川県 安井 文字
- ◇新潟県 桃谷 友孝 田中トメノ
- ◇新潟県 高林 セキ 坪井 繁男
- ◇岐阜県 堀尾 藤吉
- ◇長野県 綾部はつゑ 神田 環
- ◇岡山県 葉師寺理助
- ◇広島県 荒谷ミキエ 浦手 ハル
- ◇山口県 内富ミツヨ
- ◇香川県 奥田 和広
- ◇愛媛県 大塚喜久雄 長岡 俊夫
- ◇高知県 徳弘 萩子

- ◇福岡県 福木孝二郎 河村 末義
- ◇佐賀県 小林 繁幹
- ◇長崎県 草場 マキ
- ◇鹿児島県 安達シツヨ 大石 春見
- ◇会 友 森 テル子
- ◇会 友 井上 義夫 佐藤 敬義
- ◇会 友 鈴木 寅雄

以上は平成四年六月一日より十一月三十日まで、寄付された方々三十六名で、その合計金額は二十四万三千元でした。

靖国神社奉賛會に御入会を

靖国神社の

「みたままつり」盛大に執行

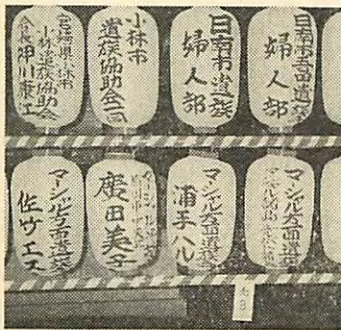
(社報「靖国」より抜粋)

東京の夏夜空を彩り「光の祭典」として多くの人々に親しまれている靖国神社の「みたままつり」が今年で四十六回目を迎え、例年通り七月十三日から十六日までの四日間、盛大に執行行われた。

この時期は丁度、盂蘭盆で各家庭では、お墓参りや迎え火を焚くなど先祖の「みたま」を偲び敬う行事が行われるが、靖国神社でも戦死者二百四十六万余柱の「みたま」をお慰めする為、昭和二十二年から斎行している。

今年、十四日、十五日の夕刻、雷雨にみまれ梅雨の影響はあったものの、日中はまずまずの天候で、連日連夜多数の老若男女で境内は賑わった。特に、若年層の参詣が目立ち、浴衣掛の男女も見受けられた。

祭典は毎日午後六時から御本殿に於



て執行。御遺族・戦友・崇敬者多数拝殿に参列する中、大野宮司以下祭員御本殿に参進。国学院大学吹奏学部が「山の幸」を奏するなか、神饌が次々と供えられ、齋主大野宮司が御祭神の御冥福と国家の平安を祈る祝詞を奏上。続いて、中庭に於て同吹奏楽部による献楽「靖国神社の歌」が奏せられた後、参列者は昇殿参拝を行い四日間とも祭典は厳肅に斎行された。

夜空に映える献灯の数々

期間中境内には、各県遺族会・靖国講・戦友会等の掲げる大型提灯や御遺族・戦友・崇敬者の方々の小型雪洞あわせて二万三千灯余の献灯が掲揚され、また各界有名人揮毫の懸雪洞や著名俳人の特別献句、入選句を墨書した大雪洞が掲げられた。

靖国神社の

「みたままつり」献灯について

靖国神社では、毎年七月十三日から十七日までの「みたままつり」に御祭神奉慰のための献灯を受付けています。御初穂料は、大型一灯八千円(写真参照)、小型一灯二千円です。

締切りは六月二十日です。くわしくは靖国神社宣徳課献灯係又は、当会にお問い合わせ下さい。

なお、この献灯行事が続く限り毎年掲揚して頂ける制度もあります。この場合は大型一灯十万円、小型一灯三万円となっています。

(1頁より)

乗物 往復とも豪華な大型観光バス
宿泊 愛知県蒲郡市 西浦温泉
西浦グランドホテル

参加費 小学生以上 三万円
バス・宿泊・中食二回を含む

申込 二月末日迄に同封はがきでお申
込み下さい。料金は同時に郵便
振替でお送り下さい。料金受領
の日を受付日とします。申込順
に受付けてバスの定員に達した
時締切ります。

本会が受取った申込みは旅行主催会
社に取りつぎ、主催会社から申込者全
員に旅行に参加できるか否かを、三月
十五日迄に通知します。

申込み後の取り消し、変更等は速や
かに左記主催会社に通知して下さい。
〒100東京都千代田区大手町一ノ六ノ一
日本通運(株)大手町旅行支店

第四課 桐谷・沖井

☎ 03-3201-1598

コース等 総会終了直後の十二時頃、
バスは弁当を積みこんで靖国神社北門
から東名高速を、富士山を眺めながら
一路西へ西へと走ります。

西浦温泉は、波静かな三河湾に突き
出た風光明媚な西浦半島の先端にあ
り、万葉歌人に愛されて、多くの歌が
詠まれた所で万葉の小径、俳句の道な
どがあります。

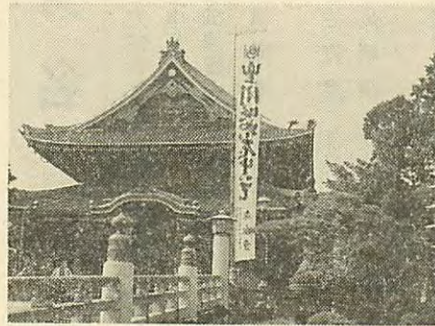
名鉄西浦駅の北側に「ガン封じ寺」

として有名な平安時代の古刹「西浦不
動無量寺」があります。

ホテル到着は六時頃と予定しており
ます。全室三河湾に面した明るい快適
なホテルです。きっと皆さまのお気に
召すものと確信しております。

翌二九日、バスは東海の聖地、三ヶ
根山に登ります。三ヶ根観音を拝み、
大東亜戦争で散華された諸霊に思いを
寄せましょう。

三ヶ根山の次は天下に名高い豊川稻



豊川稲荷

荷です。

豊川閨妙厳寺略縁起には次のように
誌されています。

『当山は、第百二代後花園天皇、嘉吉
元年十一月廿二日の昔、第八十四代順
徳天皇の第三皇子たる寒巖義尹(かんがんぎいん)禪師よ
り六代目の法孫、東海義易(とうかいぎえい)禪師の御開
創。』

本尊は寒巖禪師伝来の千手観音を安

謹 賀 新 年

平成 五 年 元 旦

◎ 本会役員及び篤志会員

顧問	栗林 徳五郎	篤志会員	石井 清
相談役	大給 湛子	同	土屋 太郎
会長	佐藤 宗丕	同	徳原 徳子
常任幹事	佐竹 エス	同	長谷川 栄次
同	昼間 栄平	同	長谷川 敏
同	荒木 常子	同	浜松 恒雄
同	石谷 典夫	同	本埜 和昭
同	黒川 誠	同	松平 永芳
同	高林 芳夫	同	村瀬 松雄
同	山口 良二	同	森山 喜久雄
同	高橋 鎮夫	同	山村 要
監事		同	横溝 幸四郎

置し、又鎮守として、寒巖禪師御感見
の善神、豊川吒枳(だき)尼(に)真(ま)天(てん)を祀る。この
善神は、通称、豊川稲荷と呼ばれ、そ
の起りは、寒巖禪師およそ七百余年の
昔、文永元年入宋求法、同四年帰朝の
ため御乗船の際、海上にて忽ち霊神現
じ、妙相端麗、稲穂を荷い、手に宝珠
を捧げ、白狐に跨がるお姿にて御神示
あり。禪師は深く感動せられ、帰朝後、
示現のお姿を手ずから刻み、守護神と
して祀られる。』

今回は希望者が多いと思われるので、
早めに申込み下さい。

本 部

〒103 東京都中央区日本橋人形町
一八二(泉商事ビル)

マーシャル方面遺族会

電話 〇三―三六六一―八七六〇
FAX 〇三―三六六一―六二四一